



「天気予報活用ハンドブック 四季から読み解く気象災害」

オフィス気象キャスター(株) 編。
田代大輔・竹下愛実 著
丸善出版、2021年3月
272頁、3,300円(税込)
ISBN : 978-4-621-30599-7

災害への備えにおいて、「自助・共助・公助」の3要素が大切だと言われる。自助は、自分自身や家族の身を守ること。共助は、地域やコミュニティなど周囲の人で助け合うこと。公助は、市町村や消防・自衛隊などの公的機関が救助すること。少子高齢化が進む昨今では、このうち自助と共助の重要性が増している。2019年3月の「防災に関するガイドライン」では「自分の命は自分で守る」と明記された。災害発生時に命を守るためには、一人一人が正しく情報を活用して状況を判断し、命を守る決断を下す必要がある。

本書では、こうした現状に適應できるように、気象キャスター経験者の視点から気象情報活用のコツが書かれている。「気象キャスター経験者の視点から」というのは大変重要な特徴だ。気象キャスターの方々には日頃より、気象の知識が無い人に対しても分かりやすい説明をすべく奮闘されており、その日々の努力が非常に良く本書に表れている。

本書の構成としては、第1章で基本的な天気図の見方、第2章で2010年代の気象災害を24事例、第3章で気象情報の活用方法を扱う。また、それぞれの章の中ではコラムが散りばめられ、巻末では「十二の季節のトピックス」や「用語集」も掲載されている。

第1章では天気図を読む上で基本的な気圧・風・気団の解説のあと、日本の四季を春から順に見ていく。天気図などの図やイラストは多く添えられているが、これに加えて載りきらない図はページ内のQRコードをスマートフォンなどで読み取ることで参照することができ、今のデジタル時代に合った形の書籍となっている。

第2章では2010年代の主な気象災害事例を24事例紹介している。各事例について、当時の地上および高層

の気象概況や被害状況に加え、そういった事例から身を守るための教訓がまとめられている。

例えば2つ目の事例は、2017年3月27日の栃木県那須町の雪崩。登山訓練中だった高校生らがこの雪崩に巻き込まれるなど、人的被害が発生した事例である。私自身、この日は高校の山岳部の活動として台湾の雪山(せつざん、標高3886m)に登っていた。違う土地とはいえ同じ日に雪の降り積もった山に登っていた身、そして関東大会で彼らと一度すれ違っていたかもしれない身として、この事例は今でも記憶に残っている。この雪崩の発生時には該当地域に雪崩注意報が出ており、登山部の気象係をしていた私は、情報の捉え方や活用方法の重要性を改めて強く感じた。

気象を防災に活かす際、複数のアプローチが必要だと考える。まずは敵(災害を起こす気象現象)の“認知”。これは学問研究や地学教育などにあたる。次に、敵への“対処”。これには、天気予報や防災教育、堤防や排水路の整備などがある。

本書は、その“認知”と“対処”を両方兼ね備えている。災害の原因となる気象現象についての科学的知見を誰でも分かるように説明して人々に“認知”を促し、その上で各事例における注意点や教訓、情報活用方法を説明し災害への“対処”を促す。

特に本書では、気象に精通していない人でも分かるような重要な用語を細かく解説されている。例えば「放射冷却」の説明では「放射」から説明するなど、誰でも読み易く理解し易い説明になっている。また、本書ではたびたび身近なもの絡めた表現があり(例えば、「大気の状態が不安定」を、重い胴体が軽い頭の上に乗っている不安定な「逆さダルマ」で表現するなど)、世代を超えて気象を身近なもので理解できる。この点で、一般人や天気予報関係者だけでなく気象の研究者にとっても、身近な人や地域の人に気象現象をどう分かりやすく説明すればよいか、ヒントを得られるだろう。

災害による犠牲者を一人でも減らせるよう、気象の知識の有無に関係なく本書を手にとった全国の方によって、家庭や地域などのコミュニティにおいて自助・共助をより多くの人に広めるために、この本が活用されることを願う。

(筑波大学生命環境学群地球学類 大友啓嗣)